令和５年度栗東市総合教育会議

開催日時　　令和５年１１月６日（月）　１０：２０～１２：００
開催場所　　栗東中学校　会議室
議　　長　　市　　長　　竹村　健
　　教　育　長　　安土　憲彦
　　教育長職務代理者　朽木　徳壽
　　委　　員　　内記　一彦
　　委　　員　　田中　和子
　　委　　員　　多田　玲子
事務局出席者　市長公室長（井上）、秘書広聴課長（西川）、秘書広聴課課長補佐（橋内）
　　教育部長（小林）、教育総務課長（大角）、学校教育課長（髙野）
　　学校教育課指導主事（辻）、書記（小林）

大角教育総務課長

それでは定刻より少し早いですけれども、ただいまから令和５年度栗東市総合教育会議を開会いたします。皆様におかれましてはご多用の中、ご出席をいただき、厚く御礼を申しあげます。

総合教育会議は地方教育行政の組織及び運営に関する法律第１条の４で定められている会議でございまして、市長と教育委員会が栗東市の教育課題や、目指すべき姿を共有し、連携して、教育行政を推進しようという会議でございます。本日の会議は、「栗東市不登校対策の方向性について」をテーマとして、意見交換をしていきたいと思いますのでよろしくお願い申しあげます。

本日は、栗東中学校にお邪魔をさせていただき、学校現場における不登校対策を皆様に見ていただこうと思います。それでは、会議の進行につきましては、栗東市総合教育会議設置要綱第４条の規定に従い、会議の議長を市長にお願いしたいと思います。

議長：竹村市長

はい。それでは改めまして皆さんおはようございます。本日はお世話になります。よろしくお願いいたします。また平素より、本市の教育行政に対しまして、様々な観点でご示唆、ご指導いただいておりますことを感謝申しあげたいと思います。

それでは本日の議題として、「栗東市不登校対策の方向性について」ということで、大変重要な議題でございます。事務局に説明をお願いして、進めて参りたいと思います。よろしくお願いいたします。

辻学校教育課指導主事

失礼いたします。学校教育課指導主事　辻と申します。説明に入ります前に、栗東中学校の不登校対策というところで、校内教育支援センター、いわゆる別室というところ、ハーバールームというところがございますので、そこをご覧いただいた後に、資料に基づいて説明させていただきたいと思います。別室バーバールームという場所と、もう一つ自習室という、昨年度作らせていただいたんですけど、二つの部屋をご覧になっていただいて、このような形にしているということを、見ていただければと思っております。よろしくお願いいたします。

では、移動をお願いいたします。

（見学）

辻学校教育課指導主事

それでは栗東市の不登校対策の方向性について、説明させていただきます。よろしくお願いします。（別添資料により説明）

まずは、本市の現状からご説明させていただきます。本市の現状ですが、やはり不登校児童・生徒数は、年々増加し続けています。昨年度の状況で言いますと、不登校児童生徒数は小学校92 人、中学校は 146 人、合計 238 人。全体の小学校 2.66%、中学校は 6.86%というところで、高い数字になっております。「その他を含む」と書いていますが、実は不登校の定義で言いますと、年間 30 日以上の欠席があり、その理由が不登校を含む者になります。「その他」という部分に関しましては、例えば、不登校気味で風邪をひいて休む 10 日間、あとは、経済的理由で 10 日間、あとはコロナ感染症回避で 10 日間とかで複合的に 30 日超えた子がその他になっております。不登校のみの数で言いますと、小学校は 86 名。中学校は 142 名。あまり変わらないですが、このような現状になっております。

続きまして、不登校の推移、平成 30 年から令和 4 年までの 5 年間の推移です。まずは小学校ですが、令和 2 年度までは横ばいの感じがあるのですが令和 3 年度、4 年度と急激に増加しております。中学校に関しましても、やはり令和 2 年度までは横ばいで、3 年度、 4 年度とやはり急激に増加している傾向があります。コロナ禍の影響がどこまで、どのようにあるかというのは定かではございません。しかしやはり増加している現状がありまして、下の折れ線グラフや、点線グラフが県と全国の値になっておりますが、やはり県・全国に比べましても、栗東市は、ちょっと多いという現状になっております。

今年度の状況で言いますと、4 月から 9 月までの人数をお知らせさせていただいたんですが、小学校は少し減っている現状があります。先ほど見ていただいた、この後、説明させていただきますが、小学校に校内別室を作ってくださいということもありまして、そのおかげもあるのかなと少し思っております。中学校は 2 倍近くなっていますが、この数というのは、不登校や不適応を含め、30 日超えていない生徒も合わせて 90 人となっております。確かに昨年度と比べてもやはり多い現状であります。

続きまして、不登校の要因として、どのようなことが要因になっているのかということを、毎年、文部科学省の諸課題調査で、県に報告しております。そこを調べさせていただきますと、小学校ではまず「無気力・不安」。続いて「親子の関わり」。ここの部分が全体の 70%以上となっております。やはり家庭の背景もあるのかなと推測されます。中学校におきましては、見ていただいてわかる通り、「無気力・不安」、「親子の関わり」というところで、全体の 60%以上と小学校と同様となっております。小学校と違うところで言いますと、下の方の「学業不振」や、「友人関係の問題」というところも、中学校では増えている現状になっております。このような要因がありまして、本市としまして、どのような不登校の対策、考え方をしていくのかというところになりますと、考え方といたしましては、「不登校はなくならなくても、不登校問題はなくせる」と考えております。どういうことか説明させていただきますと、不登校の人数を減少させることは難しいと考えております。それよりも、やはり個々に対応した一人ひとり放置しない取り組みを大事にしたいと考えています。

不登校支援率というのは何かと説明させていただきますと、担任はもちろん関わるのが前提なのですが、担任以外のスタッフ、例えば学年主任であったり、支援員であったりというところのスタッフや、あと、様々な支援ツールといたしまして、ＳＣの活用や、スクールソーシャルワーカーの活用や、あとは教室から出て別室、ハーバールームであったり、児童生徒支援室が市にあり、いろんな方法でどれだけ支援が出来ているかが支援率となっております。誰一人放置しないように、1 人ずつに合わせた支援をしていくことで 100%にできるようにと思っております。ですから、その支援率 100%を維持していくということもあるので、不登校問題についての施策が必要であると考えております。

その不登校問題とは何かと言いますと、一番はやはり子どもが学校に行かないことというところで、親が悩みます。学校に行かないというところで、放っておけない、仕事を辞めないといけない現状がでてくることや、登校しないことで親が悩みます。そうなると、やはり学校に要望が来ます。例えば別室で対応してほしいとか。中学校はこういったハーバールームがあったりするのですが、小学校はなかった現状もありますので、なぜ別室がないんだとか、別室で学習を教えてほしいという要望が一番多いんですね。そうなることで、担任や学校の先生が悩みます。少しでも子どもに応じた支援をしたいと思うんですが、やはり場所や人員が不足しているため、負担が多くなります。その人数がいないとか、ちょっとこの時間は人がいませんと説明をさせていただくと、放棄ですか、授業を受ける権利があるんじゃないですか、という要望があって、対応困難な状況になります。

もう一つ大きい問題といたしましては、学校に行っていないというところで、出席が足らない。また、授業も受けられていないというところで、評価がつかない。するとどうなるかといいますと、中学校は卒業しましても高校への進学は難しいという現状があって、進路の保障に支障が出てくるところが問題になっています。

このような不登校問題に何らかの対策といたしまして、一番は子どもの居場所づくりが必要かなと思っております。

先ほど見ていただいたハーバールームや、自習室などが、まさに居場所になっております。この居場所につきましては、この資料の最後の部分に文部科学省からの「不登校対策 COCOLO プラン」というのが策定されております。そこの部分を見ていただいた一番の柱といたしましては、不登校の児童生徒すべての学びの場を確保して学ぶ環境を整えることが重要だというところになります。下の丸印が主なところであると思うんですが、特に上の二つについて、考えさせていただきました。上の二つについて言いますと一つ目は、特例校。今年度から「学びの多様化学校」と変わったんですが、その学び多様化学校の設置、または二つ目の校内教育支援センター。先ほどの別室、ハーバールームみたいなところになっております。そこの 2 点で考えていきたいなと思っている次第です。

ではこの二つについて、先にデメリット・メリットを説明させていただきます。学びの多様化学校のメリット・デメリットといたしましては、メリットは、学校に登校できない児童生徒が通う場所ができるというところです。

学びの多様化学校というのは、別に学校を作るということです。栗東中学校もそうですが、栗東学園という形で、一つの別の学校に通うというところです。また教育課程が、1,015 時間のところが 770 時間程度で教育課程が組めるというところもございまして、少しニーズに合わせた学習ができるかなと思っております。デメリットといたしましては、次に出てくるのですが、統廃合、新たに学校を作るとなると莫大な予算になっております。他の県に行って見させていただいたのですが、統廃合した学校をリノベーションしている学校ばかりでした。もう一点、栗東の中学校学区ですが違う中学校に通っていることで、自分の通うべき中学校じゃないという、違う学校に通うというところで疎外感というのが子どもにとってはあるのかなと思います。

では校内教育支援センター、別室の方、見ていただくと、メリットといたしてはやはり通いやすい、学校の中にあるというところで、先ほども教員が通ったと思うんですけど、学校の教員との関係であったり、中にはもうクラスの友達との関係があったりとか、連携がとりやすい部分があります。また自分が通ってるというところもありますし、自分がここの卒業生だというところで、自己肯定感も上がってきております。ただデメリットといたしましては先ほど説明させていただきましたが、運営に人員が足りないというところが一番のデメリットかなと思っております。今の二つにつきまして、本市の取り組みといたしまして、考えさせていただきました。

まず、学びの多様化学校の設置の可否についてというところで、まず岐阜市立草潤中学校へ課長とともに視察に行かせていただきました。どのように設立され、どんな運営をされているのか等聞いてきました。この学校も統廃合した学校をリノベーションして設立していますが本市には統廃合はございませんので、別に二つぐらい方法を考えさせていただきました。一つ目は、市の教育支援センター、児童生徒支援室の「あいあい」というところがあるんですけど、そこを学びの多様化学校の本校にして、校内教育支援センター、先ほどのハーバールームを分教室という形で、学びの多様化学校対応ができないか。もう一つは、市内の小学校に人数が少なくなってきたところがございますので、そこを二分化して学びの多様化学校として設置がで

きないか。というところを考えさせていただきました。文部科学省に質問を投げかけたんですが、いずれも学校に通えない児童生徒が通う学校というのが学びの多様化学校、特例校となりますので、同一地域、敷地内に二つは置けないという理由から二つとも通ることはございませんでしたので、学びの多様化学校の設置となれば、違う方法も考えなければいけないかなと思っております。

続きまして、校内教育支援センターの充実化に向けてというところで、本市といたしまして今年度に市内全ての小中学校に先ほど見ていただいた部屋、あそこまで完璧な部屋ではないんですが、別室を設置しました。その点で、先ほどサポート支援員さんがおられたと思うんですけど市の会計年度任用職員の方、週 4 日の 4 時間勤務となっております。その方を不登校対策として 1 名配置しております。校内の支援主任がコーディネーターとなって運営するという形で、全部の小中学校でそのように取り組みをしてくださいと、こちらから指示をしました。するとどうなったかといいますと、上手く運営できるところもあるのですが、やはりこのような不適応等の児童生徒が増えてくるにあたって、子ども一人ひとりのニーズに合わすというところになりますと、人員が全然いない。登校制限をかけてしまわなければいけない。午後からは誰もいないし、帰ってもらわなきゃいけない。という現状もございましてちょっと運営が困難な状況になっております。

もう一つ、どちらになっても残る課題といたしましては、二つの学びの多様化学校も校内教育支援センターにも行けない、家から出られない子どもはどうするのかという問題が一つ残っております。そのような児童生徒に関しましては、やはりアウトリーチできる人材が必要かなと考えています。アウトリーチというのは、訪問型支援という形になっております。

昨年度、アウトリーチを担当する職員という形で、私がさせていただいていました。先ほど別室で見ていただいたところに女の子がいたと思うんですけど、あの女子生徒は昨年度、家から 1 学期間出られませんでした。毎日私が家に通って、ピンポン鳴らしてインターホン越しに話をする。最初の方は、「学校に行かへん、嫌。」ということばかりやったんですけど、「また明日も来るわ。」っていうことで、ほとんど毎日訪問に行っていると、少しずつ会話ができてきました。本当に抱えている悩みがあったんですけど、ずっと打ちあけてくれませんでした。でも、通って通ってアウトリーチしていくことによって、こういう別室にちょっと来れるようなって、少し心を開いてくれて、実際こういう悩みがあったんやっていうところも、打ち解けてくれたので、そういうことができる人材というのも今後必要かなと思っております。

本市において、大切にしたいと思ってる部分といたしましては、やはり「栗東が好きだ」とか、自分の「母校に誇り」が持ってるとか、栗東の「はたちのつどい」に出たいとか、そのような気持ちを持っていただきたい。子どもに持って欲しいなと思っています。そのために地域に愛着を持てるような取り組みとか、自己存在感を栗東に感じるなど、そのような思いを持ってくれるような子どもを育てたいなと思います。その結果やっぱり大人になっても栗東が好きだとか、栗東に住みたいということになりますし、将来 10 年後、20 年後にも人口が減らない栗東になっていくかなと思っております。

最後になりますが、私は 2 年間、支援主任の担当させていただきました。その時の思いであったり経験を少しお話させていただきたいなと思います。

（写真を提示）

今年の 3 月に感動の卒業式を終えることができました。このように、僕が真ん中にいるんですけど、上の方で卒業証書持ってるのは卒業生です。前列が支援員さんとスタッフ。僕以外にも関わっていただいたっていうところがありまして、みんな無事、卒業を迎えることができました。保護者の方も全員来ていただけて、感動の卒業式ができました。

他の子らは、体育館で卒業式をするんですが、しっかりとあの部屋で、校長先生から卒業証書を受けていただいて、担任ではないんですけど、担当者からというところで私が一人ひとり言葉をかけさせていただいて、もう全員が泣いて、ムービーとかも作らせていただきました。この子らの 2 年間、私が担当だったんですけど、2 年間の軌跡というところで、「君たちはこれだけ愛情を持ってもらえたんやで。」とか、「この先もこのことは忘れたらあかん。」っていうところも言わさせていただきました。この子らは、1 人は就職で、あとは高校に進学したんです。今でも辞めていません。

一昨年の子らもまだ辞めていませんので、この部屋で何かしら育ったというか、生きる力が伝わったんだなと思ったりしています。こうやって、先ほども見ていただいたときに、めっちゃ元気だなと思ってくれたかなと思いますが、今は笑顔とかありますが、当時担当者になりたてのときは今教育長でおられる安土先生が校長先生だったんですけど、支援担当をしてくれと言われて、担当させていただいたんですが、やはり初めの方は、みんな笑顔がありません。全員が。「学校なんて行かんでいいやん。」とか。「何で先生行くん。もう来んでええで。」とか。そこからの始まりでした。でも、子どもと話をしていくうちに、心の中で、ちょっとは行きたいんだなという思いもあったので、ちょっと半ば強引でもあったんですが、たくさん家庭訪問にも行かさせていただいて、こうやって来ることもできました。保護者の方もはじめは、もっと対応してくれとか、成績どうするねんというクレームがたくさんあったんですが、この 2 年間、誰からもクレームはなかったです。それだけ関わることによって、子どもも安定しますし、保護者の方も、さっきの不登校問題のところがなくなってというところがありました。担当者といたしまして、こういう部屋だったりとか、こういう支援ができると、子どもたちも、教員もすべてのところで何か良かったかなという部分がありますので。この後質問等ありましたら、受けたいと思います。よろしくお願いします。

議長：竹村市長

はい。ありがとうございました。それでは皆様方からの様々なご質疑なり、また、ご意見等いただけたらと思います。これはちょっと質問なんですが、令和 4 年度の諸課題調査からというところです。これはアンケートのとり方というかどういう調査をもってここに出ている数字が出ているのかというのが一つと、あとそれから、現在の本市の取り組みのところに、子どものニーズに合わすことで人員不足に陥り、運営が困難な状況とおっしゃっていただいたと思う

んですけど、これは具体的にうまくいってるとこと、うまくいってないとこがあるというふうに聞こえたんだけど、割合的にはどんな感じなのかという 2 点を先に教えてもらっていいですか。

辻学校教育課指導主事

はい。まず諸課題調査に関しましては、要因は担当の教員が、いろんなその子の一人ひとりの要因を見立てたというところになりますので、保護者から子どもからというわけではありません。一番見ていただいた担当者や担任の先生に、一番の要因はどれですかと国から来る質問があるんですけど、それをこちらから学校に投げさせていただいて、教員の中で取っていただいたデータになります。

続きまして人員不足の部分に関しまして、基本的には、栗東中学校は今システムが確立されていますし、その支援体制が成り立っているというところがあるので、運営が少し上手くやっていただけるかなと思うんですけど、やはり小学校に関しまして、今年度から作ってくださいというところで、部屋を 1 から作っていただいたりとか、支援体制のマニュアルであったりとか、作っていただいてるんですけど、そうなったときに、学校サポート支援員の方が、今日は 2 名来ていただいてるんですけど、週 4 日で 1 日 4 時間のところで、実際はほぼ不登校対策として 1 名しか配置しておりませんので、最悪でも 1 日空きますし、午後からとか午前からというところで対応が空いてきます。その時に、基本は支援主任が学校の教員が代わりに入ったりするんですけど、その代わりの教員も授業に出たりとかっていう現状がございますので、基本、人手が足らないというところで、ずっと結局運営ができないという部分になります。中学生、私がやった時は、ちょっと僕がバタバタして動くとき、子どもらだけでもうまくやってくれていました。ちょっとこうやって、何時になってくるから、ここまでこれやっといてとか、ちょっと個人的にこうやってやってくださいって言ったら、あわせてっていうところでやってくれたんですけど、やはり小学生はそういうわけにいかず、誰かしらやっぱり人がいる状況が必要です。

議長：竹村市長

1 点目のこの調査については先生が客観的に見て評価をされているということですね。

辻学校教育課指導主事

はいそうです。

議長：竹村市長

2 点目小学校は結構どこも人員不足であるというようなことと思うんですけど、支援の方というのは、何か資格がいるのですか。

辻学校教育課指導主事

いらないです。

議長：竹村市長

要はなんかお手伝いしてあげようという気持ちさえあればいいっていうことなんですね。

辻学校教育課指導主事

はい。学校サポート支援員という形で、小学校は一年生の児童の補助という形で入っていただいている部分がありますので、不登校対策で 1 名あてているのですが、やっぱり人数が多くて、こういった時に小学校一年生の補助行ってとか特別支援のところで補助行ってとかいうところで流用させていただくところで、それだけでも人数が足らない状況があります。

議長：竹村市長

でも、先生の資格は要らない。

辻学校教育課指導主事

はい。

髙野学校教育課長

補足させていただきますと、教職員の定数の部分が関係しておりまして、小学校は「学級数×1.2」の教員の数。中学校については、「学級数×1.5」の教員数。もともと小学校の方が、教員数が少ない配置になるわけなんです。それを埋めさせてもらうために小 1 サポートという形で、学校サポート支援、それから不登校対策として 1 名ずつの配置をさせていただいてるんですけど、やはりもともとの教員数が少ないので、小学校の方が回りきっていないというのが現状なんです。で、もう一つ言わせていただくと、3 中学校には、県費で、生徒指導関係の加配が 1 名ずつ配置されておりますので、その教員が軸となって、この別室とかの担当をしているという体制がとれてるんですけれども、小学校の方にはその加配がついていない。今年、1 校だけついたんですけれども、それも来年度つくかどうかわからないというふうな状況で、何とか小学校の方を厚めに支援していきたいなというふうには思ってます。

議長：竹村市長

はい。ありがとうございます。その上で何か皆様方からご意見等をいただけますか。どなたからでも結構です。

内記委員

事務局にちょっと聞きたいんですけど、不登校で色んな対策をされているのですが、今、話

がありました多様化学校いわゆる特例校と校内教育支援センター、いわゆる別室ということで、本市としては別室ということで対応していただいているということで、ここに書いてあるように岐阜県草潤中学校に視察へ行かれて特例校についても研究されていると思います。栗東市としては、メリット、デメリットと書いてあるんですけど、どちらの方向がより効果的と考えているのかお聞かせ願いたい。

議長：竹村市長

はい、事務局。

髙野学校教育課長

特例校の方も見に行かせていただきました。岐阜の草潤中学校、それから資料としては、京都の洛風中学校・洛友中学校の資料もいただいておりますし、見させていただいたんですが、どちらの不登校特例校も不登校特例校に入学するために、面接、体験入学、必ずあなたは、不登校特例校に入学することになったら、通えますかというふうな簡単に言うと不登校のセレクションをしている。ていうのがほとんどの状況で、定員も 45 名というふうになっております。

先ほど人数出てましたけどもあの人数で 45 名を救うだけでもちょっとさすがに特例校としてのメリットは少ないかなというふうにも、判断させていただいてまして、先ほど辻の方が申しましたように、いろんな形で、特例校の形もつくれないかというふうなことも検討したんですけれども、最終ちょっと難しいなということで、では、もう一つの校内教育支援センターということで、別室の方を充実させていくべきだろうなとは考えております。

議長：竹村市長

内記委員、どうぞ。

内記委員

ここにですね、特例校もいいんですけど、先ほど説明ありましたように、廃校があるとか、場所があるとかいうことでもないですし、お金もかかりませんで、今度再度、教室に復帰するということを考えたらやっぱり、数は多いかもしれませんが、別室で対応を進めてもらった方が良いのかなと思います。金銭面も考えると別室の方が良いのかなと思います。

議長：竹村市長

事務局、どうぞ。

髙野学校教育課長

金銭的な部分を考えると特例校を作ったとしても、県費の教職員は配置されますが、それ以外にも市費でスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、それから市費の臨時講師

を大体 3 名から 4 名はつけていると。そうなりますと大体年間人件費だけで 2000 万円を超えるかなというふうにも思ってますし、当然、教材等の準備もあります。それだけの額があれば学校サポート支援員は、結構な数を配置できるかなというふうにも思います。

議長：竹村市長

朽木職務代理者、どうぞ。

朽木教育長職務代理者

本日は、栗東中学校に来させていただきまして、ハーバールーム、自習室の状況を実際に見させていただいたということで、多分これはもう先ほど辻先生がおっしゃったように、何年もの積み重ねの上での現状だという風に思います。やっぱり最初は、もう一番大変だったと思います。それからまた一番大変なのは、やっぱり現場やというふうに思います。親御さんも悩みますし、先生も悩まはると思います。その結果、いろいろ試行錯誤の上の今のハーバールームであり自習室であるのかなというような感じを受けました。それから、栗東市の不登校対策として、一般的には学びの多様化学校、特例校、それから校内教育支援センター、別室とありますけれども、どちらもメリット・デメリットはいっぱいあるというような中で、私の考えといたしましては、まずはやはりその理由を、本人さんの児童生徒さんの気持ちを一番考えていくと、自分の学校に通えている。それから、そのことによって自己肯定感が持てるとか、それから児童生徒さんの状況に応じていつでも元の学校に出入りが出来るというような意味では、やはり校内教育支援センターが良いかなというような気がいたしました。

ちょっとここからは、私の考えをお話をさしていただきたいと思うんですけれども、先日 11 月 2 日に県の教育委員会との意見交換会がございました。その中で、6 つぐらいの分科会に分かれて、検討会、分科会があったんですけれども、そのうち二つは、いじめ不登校問題の検討会。もう一つは、読書の読書率です。その二つですけれども、これらいじめであるとか不登校であるとか読書率であるとか、学学調査の結果であるとか、そういうふうな現在の児童生徒が訴えているというのは、現在の訴えている状況でございます。それはやはり、就学前の大事な時期の子育てだと。遊びを通じて、確認していくようなものが、十分に確認できないかというような意味から、栗東市では、教育方針の一つの柱といたしまして、栗東子育て教育 Next プロジェクトという取り組みをしておりまして、0 歳から 15 歳までの育ちの連続性を重視した非認知能力を育むという取り組みを現在、教育方針の中で謳ってやっていただいております。そんな中で、非認知能力というところが、今まで以上に獲得できてるというようなことになれば、おのずからいじめであるとか、不登校であるという問題も、全国学力・学習状況調査の結果も、改善されていくのではないかなというふうなことを感じているところでございます。ただし、このことにつきましては、今日したから明日、今年したから来年結果が出るということでは全然ございません。長い取り組みが必要でございます。現在の栗東市の不登校の施策の検討も行いつつ、この非認知能力を育むと言うような取り組みも、どっか頭の隅に置いていただくとい

うような思いです。

議長：竹村市長

はい、他。田中委員、どうぞ。

田中委員

今、朽木委員がおっしゃいました県の教育委員会と市の教育委員会との分科会がありまして、私はいじめ不登校の分科会に参加をさせていただきました。何らかの今日の総合教育会議の中でプラスになることを、答えを求めようという気持ちで参加しました。しかしながら県下各市、同じ状況でありましたし、同じ悩みでありました。大津市も先程の草潤中学校に行って来たと。しかし見立てとしては栗東市と同じで難しいということです。今、事務局がおっしゃってる特例校設置という方向ではなくて、校内教育支援センター、このハーバールーム、別室みたいなところを充実させていく。それから市の「あいあい」との連携といいますか、そこの位置関係をしっかり組織立てていかないと、現場が上手く回らないと思います。中学校の不登校数はどんどん増えています。もちろん小学校も増えているので、それは中学校へ行って不登校対応は難しいと思います。小学校の対応をしっかりしていく、小学校は空き教室がないですから、中学校のように上手く回っていかないというのも一つだと思います。そのような時に支援員さんが一人でも多くいてくださると、教務や教頭や校長まで総出で職員室が空っぽという状況は避けられるかと思います。本来は 1 人の信頼できる方が、いてくださっていますが、そこへ行くまでにも繋ぎ繋ぎになろうかと思います。それでも制限をするということがあってはならないことだと思います。学びの保障と居場所作りを掲げていますので、制限は絶対してはいけないと思います。質問と意見がごっちゃになりますが、現在も本市の取り組みの「市内の小学校を二分化し、本校を設置」とありますが、これをもう少し詳しくお聞かせ願えますか。

議長：竹村市長

はい、事務局どうぞ。

辻学校教育課指導主事

大宝東小学校のところが、全学年 2 クラスになっており、当時から比べますとすごい減少、子どもの人数が減っています。空き教室がたくさんありますので、少し触って左側は大宝東小学校、右側は例えば学びの多様化学校みたいな形にしようかなと考えたんですが、それはちょっとできないと回答をもらいました。

田中委員

そういうことですね。それはちょっと難しいですね。子どもにとって良い方法を考えると難しいですね。

議長：竹村市長

よろしいですか。多田委員いかがですか。

多田委員

たくさんの子どもさんが不登校でおられるというのは、私も子どもを通わせながらそこまでとは思っていませんでしたのでちょっと衝撃を受けたんですが。今、就学前の教育というのをおっしゃっていただいていましたが、私は就園前の子ども達を見ているんです。ゆうゆう教室で、いわゆる、言葉が悪かったら申し訳ないですが、グレーゾーンの子ども達ですよね。たんぽぽ教室ではなく、グレーな子たちをゆうゆう教室へ呼んで、親子教室っていう形で見させてもらっているんですけれども、そこで一応その園で上がる前にそこに来てもらって、加配をどうするかという話を保育士と保健師さんと発達相談員さんと一緒に話し合うんですが、お母さんたちもどこに相談していいかわからないっていうのがあるとは思うんですけども、加配を嫌がる人がおられるんですね。なぜかって聞くと、「いや、うちの子はいつか治ります。主人もこういう人なんです。」とか。「主人が納得してくれません。」とか。「おじいちゃんおばあちゃんから反対されてます。」とか。「受験に関わって、受験ができなくなるかもしれないから嫌です。」とかっていう意見があったりするんです。そういう子たち、幼稚園に入って、加配を受けられたのかどうか、受けたのかどうか、その先どうなったのか私の方には情報が入ってこないのでちょっとわからないんですけども、スポーツ少年団もやってるので、小学校に行った、ゆうゆうで見ていた子ども達が小学校で会う時があるんですね。その時に、ゆうゆうで見てた子たちだからよく動くなと思ったり、やっぱり何かしらフォローがあってよかったねって思う子たちが大半。

でも、実はうちの息子もゆうゆう教室に行ってたんです。言葉が遅すぎてゆうゆう教室に行ってたんですけど、伸びたんです。加配もなく別に学習でも人間関係にも全く問題なく。だから有用性は確かにわからないんですけど、やっぱりゆうゆう教室でそうやってきちっとフォローを受けて、保護者の皆さん、加配を受けます。子ども達が困らないようにしていきます。小学校に行ってもっていうふうに考えてくださる方とやっぱり完全に拒絶される方、拒絶される方というのは、よく分かっておられないんだろうなって、こちらの説明不足もあるんですけど、そこは説明する時間がないですし、人もいないし。発達相談員さんも栗東市２名しかおられませんし、なので、やっぱりそういうところが、お母さん、保護者の方も相談するところが分からないまま、学校へ行って、やっぱり困っておられて、もしかしたら子ども達もそれで不登校になってる子たちも何人かはいるのかなって思うと、もう少し就園前の段階でもう少し丁寧な説明や関わりとかで保護者の方がいつでも相談できる場所っていうのはあったらよかったのになって、これから先ですけどあった方がいいのかなって思います。園連絡っていうのをゆうゆう教室に来てましたっていう連絡をしてもいいですかっていう、許可を取らないと園連絡ができないんです。それは拒否される方もおられるんです。ゆうゆう教室に行っていたことを隠し

ておきたいって言われる方もおられて。でもそれって絶対マイナスではなくて、すごくプラスになる。先生たちもそうやって、この子にはこういうフォローがいるっていうのを考えて接しておりますし、何もその子は障がい児っていう特別扱い、特別な目で見るわけじゃないんですけど、そういう風な思いがお母さんたちにあってなかなかそこが受け入れてもらえない。でもそういうのは是非とも利用してもらったらいいと思うし、そもそもゆうゆう教室に来てもらえない人も結構あるんです。拒否される方が。なので、是非とも利用して子どもさんの少しでも入園・入学にプラスになるように、一緒に考えられたらいいのになって思うんですけど、きっとそういうところを誰に相談していくのか、相談していいのか分からないまま過ごしておられるんだろうなと思います。そういうところも、もしかしたらこういうところに繋がっているのかもしれないと思うとちょっと胸が痛いというか何か少しできたらいいなっていう思いです。

学校以外でも、子ども達の居場所っていうのをスポーツ少年団でも少し考えていて、中学校の形の団ができないかな、とか。というのを、少しでも考えられたら、スポーツ少年団が減っていますので、中学生も来てくれたらいいのになっていうのはね、レクレーションみたいな感じで何かできるかなっていう思いは少しはあるんですけど、なかなかそういうことも進められなくて、コロナがあったこともあり、なかなか進められなくて。スポーツ少年団でもそういう意見も少し出てきています。どうしても体が動いてしまう子ども達に楽しくコミュニケーションをとる事ができればいいかなと思っています。うちの子は毎日楽しく学校に行かせてもらっていたので、学校に行かないことがちょっと不思議だったりするんですけど、人それぞれに理由があるんだなということで、ちょっとでも学校に行って、その先に繋げていけたらいいなと思います。

議長：竹村市長

ありがとうございます。今の「ゆうゆう教室」とか「たんぽぽ教室」というのが、勉強不足で、中身がよく分かっていないんですけど、皆さんは中身分かっておられるんでしょうか。

髙野学校教育課長

では元発達支援課に勤務していたのでご説明いたします。ゆうゆう教室というのは健康増進課の方で、就園前で就園前の健診とかで、ちょっと発達に課題があるのかな、どうなんだろうなぁという方をちょっと療育の手前で見ていただいてるところでして、たんぽぽ教室というのは、発達支援課の方で、このゆうゆう教室または医療関係とかからも、この子は療育、治療と保育の両面で支援していかないと駄目だよっていう園児が、たんぽぽ教室というところに通ってます。大体、たんぽぽ教室に通われている子どもさんの保護者さんは、ほぼ子どもの発達特性を理解して、こちらの方でっていうような形で、先ほど多田委員が言われてたゆうゆう教室の方は、保護者の方の理解がなかなか得にくいという課題。ただし、その保護者もちょっと心配やな、でもどうしたらいいんやろな、でもそこに通うほどではない、まだ我が子には先があるという思いを持っておられる方が多いというふうな形で。たんぽぽ教室は、療育をする場で、

ゆうゆう教室はその一歩手前って、理解を得られたところに支援をしていくというふうな形になっています。たんぽぽ教室のあとは、特別支援学級とか特別支援学校。結構、特別支援学校の率が高いと思いますけれどもそういうふうな形で、就園前からその後たんぽぽ行って、保育園幼稚園の方に通い、小学校の方に入学するという流れの一番最初のところがゆうゆう、次が、たんぽぽ、園に通いつつという子がほとんどです。

議長：竹村市長

これを通年でやってるのですか。

髙野学校教育課長

通年です。

議長：竹村市長

なるほど。ありがとうございました。今の皆さんのお話を聞いてると、いわゆる不登校になってからの対応、いわゆる対症療法というのはちょっと言葉が合ってるかどうかわかりませんけども、不登校になってからの対応と言うと、一つは、特例校みたいなお話もありましたが、どうも栗東には、ちょっとかなりいろんな面でハードルが高いであろうというようなことで、今現在、栗東中学校でやっておられるような結構上手いこといってるというお話でしたので、ここを一つモデルに、栗東市内全体に広げていく。また小学校については、人員不足が課題として顕在化しているので、ここについては何かしら手当てをしていかないと、教室はあるけれども、機能していない。とまあ、こういうことかなあというふうに思いました。

あと多田委員の方からは、不登校になる前の一つ提案といいますか、お話があったというふうに思っておりまして、そういう意味では不登校になる前の話もまた今後は、今のようなゆうゆう教室、たんぽぽ教室のお話なんでちょっと私自身が、勉強不足で申し訳なかったんです。だから小学校に上がる前、保育園に上がる前から何かそういう手だてをすることで、不登校にならないようにしていける可能性があるんではないか、というようなお話があったなと思いますので、この論点としては、学校に行かなくなった、不登校になってからの対応と、不登校になる前の対応というのが今後は一つ、市としては課題といいますか、そこは考えていかなきゃいけないところなのかなあという気がいたしました。その上で何かまた議論があれば、どうぞ。

議長：竹村市長

田中委員、どうぞ。

田中委員

今、あの対症療法とおっしゃいました。県の方でもそういう言葉が飛び交っておりました。これは今、皆が話をしたところであろうかと思います。不登校には種類というか段階というの

があろうかと思うんですね。今日見せていただいたのは、その集団。ここに来ているので、可能性というか、だから手立てが打てるのですけど。ここに来れない子どもは「あいあい」というか、市のそこへ行くのが一つありますね。段階として。学校に来れないから次の手立て。それで、次というのかまた別に、公的なものではなくて私的な民間のところがありますね。今、話題になっているフリースクール。それとさっき家庭訪問をして足しげくモーションかけて学校に来たと、とにかく出ないという子たちがいるので、私にすると 4 つあるんですけど、その 4 つを栗東市としてどのように考えていくのかということも一人ひとり、この子たちは栗東の大事な子どもで宝ですので。

議長：竹村市長

田中委員、この 4 つというのは。

田中委員

学校に来て、今見たハーバールームや自習室に来ている子。次は学校に行けない、だから「あいあい」がありますね。

議長：竹村市長

「あいあい」とは。

田中委員

市の施設ですね。そこに行けてる子ですね。公的なところに行けない、フリースクールやら、私の NPO のところに行っている。4 つ目は全然行けていない。それもひっくるめて。

議長：竹村市長

ありがとうございます。不登校の中にも、いろんな子が、大きく 4 つぐらい構成されてる感じ。特に私も聞いてますのは、そもそもこれはまだいいというか、そもそも家から出られない子がおる。そこに対して先ほどの先生の話じゃないけど家にアウトリーチをしていくというところも今やっぱり人材が足りないというのも聞いていますし。フリースクールにも行けない、家にずっとひきこもっているような子というのは、実態として何か把握してるのですか。

辻学校教育課指導主事

はい。全く行けていない子は把握しておりますが、全く何もできないわけではなくて、担任がやっぱり家行って話したりとか、先ほどおっしゃられたように、市の教育支援センターという児童生徒支援室。「だんだん」「あいあい」があるんですけど、そこに繋ぐのか。例えばフリースクールに繋ぐのか。あいあいに繋ぐのか。栗東市としてフリースクールは一つしか存在していないので今は。フリースクールは一つしかないので今は「あいあい」にまずは繋ぐ。その

あと別室につなぐ。そのあと、中学校は校内で別室があるので、支援室に繋がずに別室に繋ぐとか。という形で担任が関わっていますので、全く話せていないという子は今のところ聞いておりません。担任や学校の教師が無理っていう子もおられますので、その場合、栗東市に 2 人、スクールソーシャルワーカー、専門的な福祉の専門家というところで 2 名おられるんですがそのソーシャルワーカーの方が、学校の教員の代わりに家に行って、保護者と話したり、子どもと話たりとかして、ソーシャルワーカーの方が学校に連れてくる。学校に連れてきても、教室に入れないので、こういう別室が小学校にもあったりすると、しっかりと別室に行って話したり今年度そういうことやっていただいてる部分もあるんですけど、それでもやっぱり全く行けていない子が多いんで、やっぱり人員が足らないという現状があって、昨年度、僕がそういう立場でもあったし、授業の持ち時間も軽減されていたので、ソーシャルワーカーの代わりに、教員がやるということもできたんですけど、やはり教員がするということは現状難しいかなという思います。

議長：竹村市長

今のそしたら、いわゆるハーバールームにも来れない、あいあいにも行けない、フリースクールにも行けない子は今のところいないという理解でいいですか。

辻学校教育課指導主事

そうですね。今のところ。

髙野学校教育課長

どこにも外に出られていない子どもはいます。ただ、家にいながらも、学校側が支援をしているという状況です。今学校に行けない子ども、中学校までの間は不登校でいいんですけど、そこを出てしまって繋ぎどころがないと、ひきこもりというふうになってしまって中学校のゴールとしても、何とか次のところに繋げていく。学校なり、福祉の手を入れるなり、というふうなところが中学校のゴールにはなるんですけども、先ほどから辻が言ってますように、結局、不登校になってる子どもたちって 1 人ずつ要因とか原因が違いますので、全部個別の対応をしていかなあかん。まず、学校というか家から出たくない子どもについては、学校または教師、または支援者と関係性を作らんことには、全然前に進まないので、足繁く通って関係性を作っていく。1 人引っ張ってくるのに結構時間はかかる。というのが一番、ただ、その子が今学校に来てるっていうことは、将来的にひきこもりのリスクを低減させてるというふうなことにも繋がっていくのかな。なので、できるだけ、最初に関係性をつくれる人材が、そういう引きこもりと言うか、学校にもちょっと出られない方については、家行ってしゃべるなり、そういうふうな人材が、先ほどから言ってます、アウトリーチできる人材が必要だろうなということに繋がるかなというふうに思っています。

議長：竹村市長

そうなんだけど、聞いてるのはそういう子どもが、いるのか、いないのかを聞いている。

髙野学校教育課長

はい。います。外に出られない子もいます。

議長：竹村市長

何人くらいいるのですか。

辻学校教育課指導主事

だいたい小学校で、5 名ぐらい。

議長：竹村市長

栗東市内全体で。

辻学校教育課指導主事

はい。家から出られない。

議長：竹村市長

家にいて、先生とはインターホン越しでコミュニケーションは取れる感じですか。

辻学校教育課指導主事

はい。中学校も 5 名くらい。昨年度も担当していた子で 2 年間全く無理な子もいました。その場合はこの後というところで、発達支援室に繋いでいいとか、今ソーシャルワーカーの方が卒業してから見ていただいて、家児相と一緒に繋がるっていうケースもあります。何かしら繋げていきたいなと思っております。

議長：竹村市長

この「あいあい」には何人くらい通っているのですか。

辻学校教育課指導主事

「あいあい」には小学校で 7 名。「あいあい」と「だんだん」というのがありまして、「だんだん」というのは「相談」なんです。保護者で子どもの相談事業っていうのは、すごいもっと多いです。40～50 名くらいいます。「あいあい」は学習支援というところで、来て・学ぶ。

議長：竹村市長
　　これはどこにあるのですか。

髙野学校教育課長
　　学習支援センターです。

議長：竹村市長
　　ここは学校に来れない子が行くところですね。

髙野学校教育課長
　　そうです。

議長：竹村市長
　　「だんだん」は。

辻学校教育課指導主事
　　相談相談事業で臨床心理士の方がおられますので。

議長：竹村市長
　　これはどこにあるですか。

辻学校教育課指導主事
　　同じところにあります。

議長：竹村市長
　　そこに常設でずっとあって、40～50 名の方が入れ替わり立ち替わり、相談に来られるのですか。

辻学校教育課指導主事
　　そうですね。週 1 回 1 時間の人みたいな、集結したケースも合わせての人数なんですけど。今現在も 20 は常時。

髙野学校教育課長
　　もっと。

議長：竹村市長

これは相談やから、別にその学校に行きながら、そこに相談に行かはる感じですか。

辻学校教育課指導主事

はい、そうです。保護者の思いの受け皿として。中学校はスクールカウンセラーが配置されているんですけど、小学校に常時スクールカウンセラーが配置されていませんので、それも踏まえて相談業務ということで。そこの相談から発達に課題があるねということであれば発達支援課と繋がったり、教室に行きづらかったら学校の先生と、そういう連携をとらせていただいてます。

議長：竹村市長

そこはどっちかと言ったら、居場所というよりかは、相談ですね。

辻学校教育課指導主事

そうですね。相談の中からちょっと学校には行けないけど、あいあいには勉強部屋があるからというところで、だんだんの相談の後にあいあいに行ったりとかいう繋ぎもあります。

髙野学校教育課長

相談の方は、基本的に母子というか親子並行面接なんです。親子で来て、親と話す心理士。子どもと話す心理士。それぞれ親に課題があるのか、子どもに課題があるのかというふうなことを、両方から聞きながらそれでもう一度、継続しながら、それぞれに返していくと。そこからその隣の適応指導教室の方に繋ぐ。逆に学校の先生と一緒にコンサルテーションして、この子にはこういう支援が必要だから学校でもこうしてあげてねっていうふうなアドバイスをしてもらったりとかというようなところがその相談業務。もう一つのあいあいの方はもう完全に別室でもいけないので、違うところで、学習支援センターで支援しましょうという指導員が今 2 名います。今、小学校で 7 名、中学校で 5 人ぐらい行ってます。曜日をずらしながら、それぞれ 1 人 2 人でお互いしゃべりながらとか。小集団で、まずどういったらいいですかね、会話ができるようにみたいな感じからスタートして、ある程度スキルとして身についてきた段階で、学校戻れそうやったら学校に戻りますし。戻れなければそのまま、そこに中学校まで通うというふうな形で支援をしています。

議長：竹村市長

正直、初めて知った。そういう仕組みがあるということを。そういうのは何か、だんだんっていうのはその 40 名から 50 名の相談に訪れてやるために、それは、どういうところからそういう相談をするところがあって知らはるのですか。

髙野学校教育課長

学校です。学校側で相談。ちょっとしんどいなっていう保護者さん、子ども。で、学校側がこういう相談室がありますよっていうふうな形で紹介をして繋いでくれるんで。大体が学校から。

議長：竹村市長

それはどの町でもあるんですか。

髙野学校教育課長

最近はどこにもできてると思います。

議長：竹村市長

今ね小学校を取り巻く子どもらの教育、学びの部分もサポートするというのはすごい重層的にまたいろんなとこがあるのだと改めて感じさせてもらった。その上で、先ほど多田委員の方からの就学前のお話でちょっとあったと思うんですけど、先生がね、2 年関わった感覚で、そういうようなものを、生徒さんと家、家庭とかの関係で、その不登校になってるのも結構あるみたいなデータが出てます。今言われたような、そういうところにもうちょっと何か手をかけていくことで、何かそういう抑止できるというか、できるだけ不登校抑止できるようなことで何か先生の皮膚感覚で何か感じられるところはありますか。

辻学校教育課指導主事

ゆうゆうとかたんぽぽとか、やはりそういうところでしっかり支援が受けられている子に関しましてはあまり不登校にならない傾向にあると思うんです。でも、そこで支援が受けられていない生徒さんやったりすると、やっぱり中学校に入って不適応が出たりとかっていうのが出てくるのもあるかなと思います。

髙野学校教育課長

就学前というふうな括りでお話をさせてもらえると、加配の話だとかいろんな教室のところもあるんですけれども、就学前に、スクールソーシャルワーカーといいますか、福祉の視点を持ちつつ、お家の方にまで入っていける人材があると小学校への繋ぎやとか、そこもスムーズにいけるんじゃないかなというふうにはありますね。といいますのも、今、就学前の園の方に、小学校に配置しているスクールソーシャルワーカーを派遣しているというふうなこともあり、そっちの方に派遣すると小学校の相談時間が減ってしまうので、何とか就学前でそういうソーシャルワーカーというふうな形で入れてもらえると、多面的に支援をしてもらえるのかなというふうに思っておりますので。不登校に限らず、幅広く支援をしていただけるにはそういうふうな人材も有効かなというふうには考えてます。

議長：竹村市長

そのソーシャルワーカーさんは社会福祉士さんでしたよね。結構栗東市も採用を募集をしているけれども、なかなか社会福祉士さん自体の応募がないというか、少ない状況というのがあるじゃないんですか。例えば予算でね、やろうということになってもなかなかその人材がね、集まるかと言われると、そこもかなりハードルがあるのかなあという気がしてて。なんかそういう資格がない人しかあかんのか、何かもうちょっとそこは緩和をする中で、何かこうお手伝いをしてもらえる人でいけないのか。理想はそういう資格も多少はいいんやけど、先生こそ、今なかなか集まらないと言われている時代の中で、そこはもうちょっと現実的な対応をね、なんかしたほうがいいのかなあと思ったりするんですけど、その辺どうですか。

髙野学校教育課長

実際、社会福祉士となると、まず募集はないかなと思います。これ民生委員さんとか児童委員さんとか、そういう方で動ける方を別口で依頼するとか、そういうふうなパターンもあるのかな、地域のことを知っておられるっていうのが一番大事なことかなというふうに思いますので、ただ、その業務、今、こちらが想定してる業務は民生委員さんとか児童委員さんの業務とちょっとずれてくるかなというふうに思いますので、またそこにお願いをするというか、できるのかどうかわかりませんけれどもある程度地域の実情と言いますか、そこを把握しておられる方、お願いできる方がおられるのが理想かなというふうに思ってますので。資格にこだわらずに、地域を知っておられる方というふうなとらえ方もできるのかなというふうに考えてます。

議長：竹村市長

それは、そういう仕組みみたいな教育委員会の中でそういうものを作るのか、今の福祉系のところでやる。当然連携はしなあかんと思うんですけど、それ具体的に動かして行こうと思うと、具体的なアクションをしてるかと。もうそんなん言うてるだけなら意味がないと思う。

髙野学校教育課長

ちょっと教育委員会は厳しいかなという部分はあるんですけども、どちらにしろ連携するとなれば、こども家庭局で居場所とかそこら辺の部分とも一緒にやっていかないとあかんことかなというふうに思いますので、ワーカーさんとかのノウハウは、間違いなく学校というか教育委員会が持っていますので、そこを生かしてもらえるのであれば、お手伝いはさせていただきたいなというふうには思ってます。

議長：竹村市長

そしたら福祉部局とで教育委員会等で協議するような場を作らなあかんのかなと。当然そこには予算も当然関わってきます。

田中委員

これからの行政の一番大事なポイントでしょうね。昔から言われている縦割りとか垣根を取っ払って、子どものニーズに合わせて。口で言うのは簡単ですけど、そういった経験も少ないし、それを取り入れて、子ども中心に据えて。辻先生がもう熱弁ですごいやっててくださってて。信頼関係を結ぶことが一番学校が近いので、どうしても学校がという風になりがちですし、今までそれでやってこれたんだけど、今はこの社会的に考えると学校だけで解決しましょう、というのは皆さん無理だと思ってて、まず垣根を取っ払うところに繋がっていくんですけど。多くの人達、多くの組織、多くの関係機関、人、一緒にやるっていう方向を広げていくというか、それも考えていきたいなと思うところです。

安土教育長

ありがとうございました。先程も最初にアンケートを教員の客観的な見方で、無気力・不安であったり、家庭的な原因も多い一方で、読売新聞の記事をみていると、フリースクールに行ってはる連絡協議会のアンケートでは、親の見立てでは、やはり、先生が原因で学校に行きにくくなった、カリキュラムが合わないとか。体の不調、友達の事が原因であったっていう一方でそういったアンケート。ただ原因は確かにいろいろあると思うんですね、多分そんな単純なものじゃなくて複合的なんだと思うんですけど、やはり子どもを通して、支えていくかっていうことを考えると、さっき辻先生がいってくれはった隣の部屋ですよね、ああいう所で、高校に行っても辞めずに続けている。あの子らにとってはあの部屋があったことによって、人生変わっていくわけなんで、やはりそういったことをどう支えていくかっていうのが大きいポイントで、それ以降になったら引きこもりなんですよね。これは社会的な問題があるのは目に見えてることだってそうなってきたらこれは学校の問題だけではなくってこれは市全体で考えていかなあかん問題で、やはり家から出られない子をどれだけこれから減らしていくかっていうのがポイントになってくるわけで、みんなで知恵を使っていかなあかんのかなという思いでこういう会議を作らせていただいたわけです。だからその辺ではある程度方向性、市の方向性も多様化学校にするのか、別室みたいなことでやっていくかというような部分での話も含めて、今日は非常にありがたい、充実した話ができたかなと思いますし、先ほど市長さんが言っていただいたようにこれも縦割りでは絶対無理だと思うので、どことこう連携していってそれで今ある市の資源をうまく活用していかなあかんって見えてると思いますので、その辺は事例も含めて予算からもう、しっかりと次年度の事を考えながらやっぱりやっていかなあかん、そういう思いでおります。そういった部分で、今日はいろんな話を話し合っていただいてありがたかったなという思いで、最後感想とさせていただきます。ありがとうございました。

議長：竹村市長

このあとの進行は、事務局でお願いします。

大角教育総務長

それでは、進行の方をちょっと事務局の方へお返しいただいたということで本日は栗東市不登校対策の方向性について貴重なご意見やご提案をいただきまして、誠にありがとうございます。事務局といたしましても、頂戴いたしましたご意見や提案を参考に、これからも不登校の子ども達に確実に支援をしていけるように、取り組みを進めて参りたいと考えてございます。それでは最後に市長様より、閉会の言葉を頂戴したいと思います。

竹村市長

はい。本日は大変皆様お忙しいところご参集いただきまして、ハーバールーム、また自習室の見学、そしてまた今の意見交換会ということで、大変貴重なご意見等いただいたと思います。私自身も知らなかったことを知る機会でもありましたし、頭の整理も少しできたように思います。いずれにいたしましても、不登校になる前の手当も必要だろうということ、またそれだけでは、やはり不登校がなくせるというわけではございませんので、不登校の子どもらが出てからの対応というのも、またやっていかなきゃいけないということだろうというふうに思います。いずれにいたしましても、このような会議を持たせてもらって、いい意見が出たねで終わっていたら、何のための会議かわかりませんので、今日のいただいたご意見をもとに、来年度の取り組みとして、一つでも二つでも進めていくことが大切であり、今日の会議をやった意味があるのかなというふうに思いますので、ぜひそういう姿勢で、令和６年度予算に向けても、私自身も考えて参りたいと思います。今日は部長級が２人来ておりますので、また連携をとっていただきながら、縦割りを打破しながら、子どもたちのためにどういうことができるのかというような視点に立って、取り組みを進めて参りたいという思います。

様々予算等のハードルはあるんですけども、何か一つでも二つでも、結果が残せるように取り組んで参ることを誓い申しあげまして、ご挨拶また閉会に当たりましての御礼にかえさせていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

閉会宣言　１２時００分